

|    |    |            |         |
|----|----|------------|---------|
| 03 | 瀬戸 | 瀬戸市立みつば小学校 | ハヤシ ユウゴ |
|    |    |            | 名前 林 悠悟 |

|       |    |      |             |
|-------|----|------|-------------|
| 分科会番号 | 15 | 分科会名 | 進路指導・キャリア教育 |
|-------|----|------|-------------|

## 研究題目

地域と共に学び、社会に働きかける生徒の育成

～探究のサイクルを基盤とした3年間の系統的キャリア教育の実践～

### 1 主題設定の理由

本校は、外国にルーツをもつ生徒が全体の約30%を占め、就学援助率も約50%にのぼるなど、経済的に困難な家庭を背景にもつ生徒が多い。年間不登校生徒が約10%存在するなど、生徒の抱える背景や課題は極めて多様である。特に外国にルーツをもつ生徒は、言語や文化の違いから学校生活になじみにくく、将来のロールモデルを見いだすことも難しい。こうした背景が、生徒が「学ぶ意味」や「働くことの意義」を実感できないまま中学校生活を送ることにつながっており、本校として解決すべき大きな課題となっている。

一方、これまでのキャリア教育を振り返ると、職場体験などの体験活動が一過性の行事として終わってしまい、体験後に生徒が「楽しかった」で完結してしまうことが多かった。また、各学年での実践が次学年へ引き継がれず、学びが積み重なっていかなかった。体験を次の学びへと循環させながら、地域や社会との関わりを段階的に深める構造がなければ、本校の生徒が社会的・職業的自立に向けた力を身に付けることは難しいと考えた。

そこで本研究では、実生活や社会との関わりを探究的に学ぶことができる「総合的な学習の時間」をキャリア教育の柱として位置付け、3年間を見通した系統的な実践を構想した。様々な大人や地域と関わる中で、生徒が自らの生き方を主体的に考え、社会に働きかける力を育てたい。こうした実践が生徒の自己肯定感を高め、社会的自立に向けた力を育む有効な手立てになるのではないかと考え、この主題を設定した。

### 2 研究の方法

#### (1) 目指す生徒像

○自分と社会とのつながりを実感し、主体的に未来を切り拓こうとする生徒

#### (2) 研究の仮説

探究のサイクルを核とした総合的な学習の時間を3年間にわたり系統的に実践し、外部人材を活用して地域と関わる体験活動を取り入れる。これにより、生徒は学ぶ意義を理解し、地域や社会とのつながりを実感しながら主体的に社会に働きかける力を身に付けることができるだろう。

#### (3) 研究の手立て

手立て① 3年間を見通したキャリア教育全体計画の作成と系統的な実践

実践を単発的行事で終わらせないため、3年間を見通した全体計画を作成し、生徒が段階的に地域や社会との関わりを広げられるよう系統的に実践した。

手立て② 総合的な学習の時間における探究のサイクルを重視した学習の推進

総合的な学習の時間を核とし、探究のサイクルを繰り返す学習を展開した。生徒が自ら問いをもち、学びを地域や社会と関連付けながら主体的に取り組む態度の育成を図った。

手立て③ 地域の人々や社会人などの外部人材との継続的な交流の場の設定

外部人材との関わりを職場体験に限定せず、出前授業や協働活動を学年に応じて系統的に位置付けた。地域の人々や社会人の多様な生き方や仕事への思いに触れることで、地域や社会とのつながりを実感しながら、働く意義や社会貢献の大切さを捉えられるようにした。

#### (4) 対象生徒

令和5年度入学～令和7年度卒業 光陵中学校生徒 71名

#### (5) 検証方法

定量的な検証として、毎年度実施している学校評価アンケート（生徒用）を分析した。

### 3 研究の実際と考察

#### (1) 3年間を見通したキャリア教育全体計画の作成と系統的な実践

キャリア教育を単発的な取組に終わらせないため、全体計画〈資料1〉に基づき3年間を見通した系統的な指導を行った。全体計画の目標を、1年「将来に対する夢やあこがれ」、2年「社会との関わり・思考」、3年「目標実現への主体的行動」と段階的に設定し、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の段階的な育成を重視した。

〈資料1〉キャリア教育全体計画



この全体計画を踏まえ、1年生では「働くことの意味」を考えて将来への興味・関心を広げ、2年生では「商店街で働く体験」を通して自分と社会とのつながりを実感できるようにした。3年生では「光陵フェスティバル」の企画・運営を通して、社会における自己の役割を主体的に考えられるようにした。「将来を考える→社会と関わる→社会に働きかける」という流れで学びを積み重ねることで、生徒が地域と共に学び、社会に働きかける力の育成を目指した。

#### (2) 総合的な学習の時間における探究のサイクルを重視した学習の推進

##### ① 単元計画

1年生では「なぜ人は働くのか」「地域の産業ものづくりとは」「つくる喜び」の3つの小単元を通して、職業インタビューや建設業体験、ものづくり体験を探究のサイクルで展開した。働くことの意味を問いから始め、体験で得た気づきを整理し、まちづくりプランや新商品として発信するところまでつなげた。

2年生では「地元のお店を知ろう」「よさや工夫を探ろう」「魅力を広げよう」の3つの小単元を通して、商店街探検や職場体験を探究のサイクルで展開した。商店街の現状への問いから始め、職場体験での気づきを整理し、地域情報誌として発信するところまでつなげた。

3年生では、これまでの学びの集大成として地域に実際に働きかける実践を展開した。

|                              | 課題の設定                                          | 情報の収集                                    | 整理・分析                                   | まとめ・表現                           |
|------------------------------|------------------------------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------|----------------------------------|
| 小単元①<br>「菱野団地をよりよくする方法を考えよう」 | ・菱野団地の現状や課題に目を向け、「よりよい地域にするにはどうすればよいか」という問いをもつ | ・フィールドワークや地域の方の話を通して、地域の魅力や課題について情報を集める  | ・収集した情報をもとに、地域の特徴や課題を整理し、活性化の方向性を考える    | ・自分たちなりの地域活性化の案をまとめ、発表           |
| 小単元②<br>「光陵フェスティバルを創り上げよう」   | ・自分たちの提案を実現するために、「どのようなお祭りにすればよいか」という課題の設定     | ・市場調査や外部講話、試作活動や準備活動を通して、商品や運営に必要な情報を集める | ・商品内容や役割分担、運営方法を検討し、改善を重ねながら具体的な計画にまとめる | ・光陵フェスティバル当日に実際に店舗運営や企画を行い、地域へ発信 |

|                               |                                           |                                    |                                  |                                  |
|-------------------------------|-------------------------------------------|------------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|
| 小単元③<br>「フェスティバルの成果を未来につなげよう」 | ・フェスティバルの成果を踏まえ、「どのように学びや利益を生かすか」という課題の設定 | ・売上や活動記録、外部の意見などをもとに、活動の結果や課題を振り返る | ・決算や振り返りを通して成果と課題を整理し、利益の活用方法の検討 | ・利益の活用や最終報告会を通して学びを発信し、地域への還元を図る |
|-------------------------------|-------------------------------------------|------------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|

## ②研究の実際

本研究では、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の探究のサイクルを意識した学習を展開した。

1年生では職業インタビューや建設業体験を通して働く人々の価値観に触れ、「働くことの意味」を自分の言葉で再定義して発信した。建設業体験で得た気付きと地域の現状を結び付け、「未来のまちづくりプラン」として瀬戸市長や都市計画課へ提案・発表を行った〈資料2〉。生徒は地域の課題を自分事として捉え、子どもならではの視点で解決策を考えることができた。さらにものづくり企業訪問〈資料3〉を通して「つくる人の思い」や「使う人の視点」を踏まえた新商品を考案して発表し、働く意味や地域との関わりについて段階的に理解を深めることができた。

2年生ではフィールドワーク前、生徒の多くが商店街を「シャッター街」とイメージしていたが、実際に訪れることで若い世代向けの新しい店舗が多いことに気付いた〈資料4〉。職場体験では1年生で培った「相手の思いに触れる」学びを生かし、仕事への思いやこだわりを実感する姿が見られた。作成した情報誌を商店街や市役所などへ設置し、地域の方から「分かりやすい情報誌であった」と評価された経験を通して、「中学生でも地域に貢献できる」という認識をもつようになった。

3年生では菱野団地内のフィールドワークや「みんなの会」との対話を通して菱野団地の課題に直面し、地域活性化の手立てとして光陵フェスティバルの開催という方向性を見いだした。班ごとに「会社」を立ち上げ、商品プレゼンと相互フィードバックを経て計画をブラッシュアップした。

### 〈資料5〉商品プレゼンにおける生徒間の相互フィードバック

- ・光陵の外国籍が多いことをお店に結びつけるのはびっくりした。地域の良さも知ってもらえるアイデア商品だと思った。
- ・瀬戸焼きそばとたませんを組み合わせるというアイデアと、ターゲットが学生なのがとてもマッチしていていいと思いました。

当日は早期完売の成果を上げた一方、「需要の見通しが甘かった」と振り返るなど、社会の中で自分たちの考えがどう受け止められるかを実感することができた〈資料6〉。利益の使い道を議論し、地域への還元という形で学びを社会へつなげた。

## ③研究の考察

1年生では「働くことの意味」や「ものづくりの魅力」に関する理解の深化が見られた。アンケート結果〈資料7〉において「周囲の仕事に関心をもっている」が63.4%から81.3%へと向上した。体験が「見て終わる」ものではなく「考えて発信する」ところまで

〈資料2〉生徒の発表用スライド



〈資料3〉3Dプリンターで作成した自分の銅像



〈資料4〉FWでインタビューの様子



〈資料6〉フェスティバル当日の様子



繰り返したことで、生徒が身近な働く人への関心を高め、働くことを「自分事」として捉え直していったと考える。

#### 〈資料 7〉仕事の魅力 実践アンケート

| 項目                      | 事前 (%) | 事後 (%) | 変化    |
|-------------------------|--------|--------|-------|
| 自分の考えを、分かりやすく伝える工夫をしている | 51.2   | 79.7   | +28.5 |
| 自分の考えを、自信をもって伝えることができる  | 53.7   | 75.0   | +21.3 |
| 周囲の仕事に関心をもっている          | 63.4   | 81.3   | +17.8 |

2 年生では、地域と関わる中で「自分たちも社会に貢献できる」という認識が生まれた。職場体験を通して 1 年生で学んだ「働く意味」をより具体的なものへと深め、情報誌を地域の方から「分かりやすかった」と評価された経験が、自分たちの取組の手応えを実感する大きな契機となったと考える。

3 年生の実践では、地域に関する認識の変容が顕著であった。アンケート結果〈資料 8〉において「菱野団地には、子どもたちが集まれる場所がある」が 63.7%から 81.0%へ、「菱野団地には、家族で集まれる場所がある」が 46.6%から 69.0%へと大きく向上した。当初「自分たちには何もできない」という気持ちをもっていた生徒が、フェスティバルを通して実際に地域へ働きかける経験を積む中で、「自分たちの行動が地域に影響を与えることができる」という実感をもつようになったためと考える。一方で、「将来、菱野団地に住みたい」の項目に大きな変化は見られなかった。地域への理解が深まる中で構造的な課題も現実的に見えるようになったためと考える。定住意識にまでつなげることは今後の課題として残った。

#### 〈資料 8〉光陵フェスティバルを開こう実践 アンケート

| 項目                   | 事前 (%) | 事後 (%) | 変化    |
|----------------------|--------|--------|-------|
| 菱野団地には、子どもが集まれる場所がある | 63.7   | 81.0   | +17.3 |
| 菱野団地には、家族で集まれる場所がある  | 46.6   | 69.0   | +22.4 |
| 将来、菱野団地に住みたい         | 38.8   | 41.4   | +2.6  |

さらに、「地域の人と関わることができ嬉しかった」「お客さんの笑顔がやりがいになった」といった感想からは数値では捉えきれない学びの深まりが確認でき、「準備の大変さ」や「役割の難しさ」といった語りからは働くことの現実や責任についても理解していることが読み取れる。

これらの変容は、1 年生での「働く意味」、2 年生での「地域との関わり」が 3 年生の実践へと結び付き、学びが連続的に積み重ねられた結果である。アンケートの数値と生徒の感想の双方から、探究のサイクルを核とした系統的なキャリア教育が生徒の学びを「知る」から「関わる」、そして「社会に働きかける」段階へと発展させる上で有効であったと考える。

### (3) 地域の人々や社会人などの外部人材との継続的な交流の場の設定

#### ①研究の実際

本実践では、外部人材の関わりを段階的に設定することで、生徒の学びを教室内にとどめることなく、実社会と結び付けながら展開した〈資料 9〉。

#### 〈資料 9〉外部人材の活用の概要

| 学年  | 主な外部人材             | 主な活動内容             | 役割            |
|-----|--------------------|--------------------|---------------|
| 1 年 | 職業人、建設業関係者<br>地元企業 | 職業講話、建設業体験、ものづくり体験 | 働く意味・職業理解の具体化 |
| 2 年 | 地域企業・事業所           | 雑誌レイアウト指導、職場       | 実社会理解・進路意識の深化 |

|     |                     |                        |              |
|-----|---------------------|------------------------|--------------|
|     |                     | 体験                     |              |
| 3 年 | 銀行、商工会議所、行政<br>地元企業 | フェス企画・運営、商品開<br>発、協働活動 | 社会参画・実践的課題解決 |
|     | 大学生・地域団体            | 週 1 回の継続的支援（伴走<br>型）   | 探究の深化・継続支援   |

1 年生では建設業体験を通して、測量やショベルカー掘削、  
タイル看板制作など実際の仕事に即した活動を行った〈資料  
10〉。生徒は職人の技術や仕事の大変さ・やりがいを実感し、「働  
くこと」を具体的に捉える姿が見られた。また、市内約 30 か所  
のものづくり事業者での製作活動を通して、作り手の思いや工  
夫に直接触れながら成果物を完成させ、大きな達成感を味わう  
ことができた。

〈資料 10〉足場の設営の様子



2 年生では外部人材から情報誌の構成や表現方法について助言を受けながら、2 日間の  
職場体験を実施した。1 年生よりも長期間職場で過ごす中で、1 年時の「相手の価値観に触  
れる」学びが生かされ、働くことの意味をより深く理解する姿が見られた。

3 年生では銀行、商工会議所、行政、大学、地域団体等と幅  
広く連携し、実社会と密接に関わる活動を展開した。特に大学  
生や「みんなの会」とは週 1 回程度の伴走型支援体制を構築した  
ことで、顔なじみの関係の中で、生徒が自ら相談しながら活動  
を進める姿が見られた。例えば、瀬戸焼そばの店舗運営では、自ら  
地域の製麺所へ連絡し、麺の購入方法や調理の工夫について助  
言を受けるなど、地域資源を活用した活動が見られた〈資料  
11〉。また、学んだことを家庭に持ち帰り、実際に瀬戸焼そば  
を作るなど、学びが家庭生活へと広がる様子も見られた。さら  
に、フェスティバルで得た利益の使い道については、地域への還  
元を目的として「みんなの会」への寄付を提案する班が多く見ら  
れ〈資料 12〉、生徒が地域の一員として主体的に関わろうとする  
意識の高まりにつながったと考えられる。

〈資料 11〉製麺所との交流の様子



〈資料 12〉みんなの会へ寄付の様子



このように、外部人材との関わりを系統的かつ継続的に位置付けることで、生徒が学びを  
段階的に深めながら社会と関わる学習を実現することができた。

## ② 研究の考察

1 年生では建設業体験やものづくり事業者での製作活動を通して、職人の技術や仕事の大  
変さ・やりがいを実感し、「働くこと」を具体的に捉える姿が見られた。これらの体験的な学  
びにより、生徒の中に働くことへの興味・関心が生まれ、地域や社会と関わりながら学ぶ土台  
が形成されたと考える。

2 年生では外部人材から情報誌の構成や表現方法の助言を受けながら、職場体験を通して  
地域で働く人々の思いや姿勢をより具体的に感じ取ることができた。1 年時の「相手の価値観  
に触れる」学びが生かされ、働くことの意味をより深く理解しようとする姿が見られた。

3 年生では伴走型の支援体制を通して顔なじみの関係を築いたことで、生徒が自ら相談し  
ながら活動を進める姿が見られた。フェスティバルで得た利益の使い道を主体的に検討する  
過程を通して、自分たちの活動が多くの人々に支えられていることを認識し、地域の一員と  
して関わろうとする意識が育ったと考える。生徒の感想にも「オープンと同時に焦ってしまった  
が、大学生がサポートしてくれて助かった」「地域の人と関わることができて嬉しかった」と  
いった記述が見られ、外部人材が、生徒が安心して挑戦できる環境をつくる存在として機能し

ていたことが読み取れる。

以上のことから、外部人材との継続的・伴走的な関わりは、生徒にとって単なる支援ではなく社会との接点として機能しており、生徒が社会と主体的に関わろうとする態度の育成につながったと考える。

## 5 研究のまとめ

### (1) 研究の成果

〈資料 13〉 R7 卒業生 学校評価（生徒）の変容

| あてはまると答えた生徒の割合の変化                           | R5   | R7   | 変化    | R6 卒業生 |
|---------------------------------------------|------|------|-------|--------|
| 学校のきまりやルールを守って生活している。                       | 37.9 | 75.8 | +37.9 | 48.0   |
| 授業中、自分から進んで学習に取り組んでいる。                      | 29.3 | 48.4 | +19.1 | 38.8   |
| 地域や社会をよくするために何かしてみたい。                       | 25.9 | 31.7 | +5.8  | 16.0   |
| 自分にはよいところがあると思う。                            | 34.5 | 50.0 | +15.5 | 22.9   |
| 自分には将来の夢や目標がある（もっている）。                      | 41.4 | 54.5 | +13.2 | 42.2   |
| 目標を達成するために、諦めず努力をし続けることができる。                | 27.6 | 43.3 | +15.7 | 28.0   |
| キャリア教育を通して、自分の興味・関心があることや、自分のやりたいことが分かってきた。 | 20.7 | 33.3 | +12.6 | 10.2   |

3つの手立ては互いに関連しながら効果を発揮したと考える。その成果を学校評価アンケート〈資料 13〉の結果に基づき検証する。

まず、主体的な学習態度について、「自分から進んで学習に取り組んでいる」が 29.3%から 48.4%へと向上した。探究のサイクルを繰り返す中で、自ら課題を見だし学びに向かう姿勢が育ったと考える。次に、自己肯定感や将来への意識について、「自分にはよいところがあると思う」が 34.5%から 50.0%へ、「将来の夢や目標がある」が 41.4%から 54.5%へ、「あきらめず努力できる」が 27.6%から 43.3%へと向上した。また「キャリア教育を通して、自分のやりたいことが分かってきた」も 20.7%から 33.3%へと伸び、R6 卒業生(10.2%)を大きく上回った。地域の様々な大人と出会い、働くことの意味を自分事として考え続けた3年間で、生徒の自己理解と将来への見通しを深めたと考える。

さらに、「地域や社会をよくするために何かしてみたい」が 25.9%から 31.7%へと向上し、「学校のきまりやルールを守って生活している」が 37.9%から 75.8%へと大きく向上した。社会参画への意識と社会の一員としての自覚が育った表れであり、社会的・職業的自立の基盤となる力の育成につながったと考える。

本研究で目指した「地域と共に学び、社会に働きかける生徒」の育成に迫る上で、有効な実践であったと結論付けることができる。

### (2) 今後の課題

本研究により、3年間の系統的な実践の有効性が明らかとなった。一方で、今後の課題として以下の4点が挙げられる。

第一に、総合的な学習の時間と教科学習を往還させる視点をもった指導の充実である。第二に、アンケートにとどまらず行動の変容や学びの持続性を把握するため、ポートフォリオやルーブリックを活用した長期的な評価方法の検討である。第三に、自己肯定感や将来への見通しをもちにくい生徒に対して、小さな成功体験を積み重ねさせる個に応じた支援の充実である。第四に、担当者の個人的なネットワークに依存しない、学校として持続可能な外部連携体制の整備である。これらの課題を踏まえ、生徒が地域と共に学び、社会に働きかける力の育成を一層推進していく。